春のさくらんぼ。

亜純　玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春のさくらんぼ。

【Ｎコード】

Ｎ９０１１Ａ

【作者名】

亜純　玲

【あらすじ】

初恋。そんな経験をしたのは中学三年の春。誰を好きになるかなんて神の気まぐれの様なもの。そんなきまぐれに弄ばれながらも、運命の相手にめぐり逢えたら…。でも「恋」の苦味は、まだまだ分からない。「恋」という感情の一つで、こんなにも揺さぶられるなんて…その頃の私には考えもつかない事でした…―

Prologue（前書き）

登場人物・設定等においての批判は一切受け付けません。

Prologue

――初めての恋。

そんなもの経験をしたのは、中学3年の頃。
今まで「恋」の「こ」の字も知らなかった私。
友達が彼氏の話をして、好きな人の事を話して、泣いたり笑ったり
励ましあったりしてる、
いわゆる「恋バナ」と言うもの…
それについて今までよく分からずに、聞いていた私。
だけど…
予知能力なんて魔法みたいなものが備わっているわけが無い私には、
この「恋」という代物がどんなものだかなんて、分かるわけもなく。

「恋」とは、こんなにも苦しく、愛しく、幸せで、悲しいものだとは…
この私が「恋」について語れるわけはないけど、
私から感じる「恋」は、少なくとも、そんな感じでした…

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

作者より

こんにちは、亜純玲（あずみれい）です。

まだまだ未熟者ですが、どうぞ宜しくお願いいたしますｗ

第一部　春

私達は知らない内に惹かれあっていたのかもしれない
そんな事思うのは、私だけかもしれないけれど…

＊＊＊＊＊＊
「私はー…っとあ、あった！」

――4月　始業式
季節は春。
クラス分けが貼ってある昇降口の壁に、ものすごい数の人だかりが出来ている。

その中で、1人の生徒が声をあげた。
少しくせが入ったロングヘアー。身長は高い方で、外見からすると大人っぽい子だ。
彼女の名前は、水野沙世（みずのさよ）。
今日からは中学3年生。
2年の時とは違うクラス。少し不安だった沙世だが、自分の名前を見つけて少し安心した。
だけど、他の人の名前を見てみるとはっきりいって少しがっかりした。
2年の時、クラスは違かったが、部活で仲良くなった友達とはクラスが違う。
おまけに知ってる人は居るものの、特に仲が良いというわけではない。同じクラスで仲良しだった子達も違うクラスになってしまった。
「はぁ……」

ため息をつきながらも、決まってしまった事はしょうがない。
重い足取りで沙世は昇降口で靴を脱ぎ上履きを履いて階段を上っていった。

３年３組。
クラスは全部で６クラスある。
だから３組は真ん中。良いのか悪いのか分からないが、沙世はまた１つため息をつく。
…最悪…。
そんな事を思いながらも教室に足を踏み入れた。
（あー、やっぱり…）
予想的中。
女子も男子もあまり良く知らない顔ばかり。１０人位は知っている顔があったものの、特に仲が良いという人はいなかった。
そして、黒板に貼ってある席順表を見て自分の名前を探した。
「私の名前は、っと…」
４列目の一番後ろの席…。
隣の席の人は…野口春樹…？
（「はるき」って読むんだよね）
まぁ、良いや。そんな感じで１通りざっと座席表を見ると沙世は席に着いた。隣の席の「野口春樹」って人はまだ来ていない。
適当に教室を見回してみていると、
「あれ、沙世？」
ふいに自分の名前を呼ばれて後ろを振り向くと、懐かしい顔があった。
中学１年の頃結構仲が良く同じクラスだった、遠藤美咲（えんどうみさき）。
綺麗な顔立ちで、ほっそりした体系。背も高く、綺麗なウェーブのかかった長い髪。
つり目なせいか凛とした雰囲気を漂わせている…そんな人だ。

「あ、美咲？久しぶり！美咲も3組だったんだ～」
「そ。このクラス、あんまり知ってる人が居なくてねー何か嫌だったんだけど…ま、沙世が居てくれてて良かったわ」
美咲が周りに居る騒がしそうな男子や知らない女子の顔を見て言う。
「うん、私も。美咲が居てくれてて良かった～」
素っ気無い言い方だが、何故か美咲の言葉には優しさが感じられる。
沙世は笑顔で返事をした。
そんな結構大人っぽい沙世も、側に美咲が居ると少し幼く見えてしまう。
喋り方も、顔も、性格も、全然似ていない2人。
何故か知らないが今まで関係がずっと保てていた。声に出して言葉を言わなくてもお互い和解し合えていた。
沙世は、美咲が3組だという事を知って心底安心した。それに安心した理由はそれだけでは無い。
美咲が自分と同じ心境だった事、そして自分がこのクラスのメンバーでいて良かった…と言ってくれて嬉しかったからだ。
素っ気無く、物事をはっきり言う美咲だが、そんな美咲が友達な事を沙世は心から喜んでいた。そんな友達との嬉しい再会を教室に入ってきた教師の声で止められてしまった。
「はい、じゃあ自己紹介とか色々始めていくからなー。席につけー！」
「あー面倒くさいなー、じゃあ私行くから。また後でね」
手を振りながら面倒くさそうに美咲は自分の席の方へ走っていった。
クラスの皆も席に着いて、少し静かになった。
「じゃあ始めに出欠の確認するから、自己紹介は後で。えーと…遠藤美咲さんっ」
「はい」
あきらかに面倒くさそうに窓の外を見ながら美咲は返事をした。だが、あまり教師は気に求めず次々と生徒の名前を挙げていく。
沙世は、美咲らしいなぁと思いながら見ていた。目線を戻して前を

むこうとすると、ある事に気づく。
（あれ、そういえば隣の席の人まだ来てない…）
そう、まだ沙世の隣の席…「野口春樹」がまだ来ていなかった。
不思議そうに沙世が考えていたその時…
バタバタッ
「あー、3組どこだよー。あ、すみません先生！3年3組ってどこだか分かりますか！？」
しんとした廊下から、急いで走ってくる足音と、男子生徒の声が聞こえた。
廊下に居た教師は、教室の場所よりも先に「どうして遅刻したんだ？」と聞いていた。
男子生徒はおどおどしながら「あ、あの…その…」と、口をもごもごさせながら曖昧な返事をする。
（はっきりしない人だなぁ…誰だろ？）
あまり気にせず沙世は男子生徒と教師とのやり取りを聞いていた。
「なんだ、はっきりしなさい」
「あ、すみません。あの、寝坊…しました…」
男子生徒は少しうつむきながら、そう言った。
「まったく、夜遅くまでゲームでもしてたんだろ――」
「ち、違います！俺ゲームとかあんまやりません！」
教師は少し呆れた様に言いかけた時、男子生徒が間発いれずに懸命に否定した。
他のクラスからクスクスと笑い声があがった。
「そうか、悪いな…あ！そういえば3組は目の前にある教室だからなっ」
男子生徒の声に驚いた教師は少し慌ててそう言った。
男子生徒は他のクラスからの笑い声と自分の行動に赤面しながら「あ…す、すみません！ありがとうございます」と言った。
「あっはは、あれ春樹だよな～？」
「そー。ウケる～！」

彼と教師とのやり取りが終わった時、沙世の教室ではそんな声が色々聞こえていた。
そんな声が聞こえている時、その「彼」が教室に入ってきた。
1段と笑い声があがる。
「よっ春樹！素晴らしい会話だったな～」
「さっすが春樹クン～今日はいつもよりキレが良いボケっぷりだったぜ！」
次々に「彼」へのひやかしの声があがった。
「うっさい、ウケねらいだよっ」必死にごまかしながら「彼」は席に着こうとした…「野口春樹」の席、沙世の隣だ。
（あ、この人が「野口春樹」君か、背高いなー１７０ｃｍ以上ありそう…）
沙世は隣に座っている春樹を横目で見た。
さらさらしていて茶色っぽい髪質で、とても綺麗な顔をしている。
（何か、運動も勉強もできそう…「完璧」って感じかな。でも、何か――）

変な人…

決して悪い意味で「変」と思った訳じゃないが、彼にはそう感じ取られたのかもしれない。
「あ、ごめん。かなり変だったよな…？」
春樹はそう言って困った様に笑ってきた。
「あ、いや。悪い意味では見て無いよ？ただ、すごい天然だなぁって思って…」
沙世は作り笑いを浮かべながら慌ててそう言った。
「ほんと？良かったぁ…あ、そうだっ俺は野口春樹です。1年間よろしく！」
一気にそう言うと春樹は手を出してきた。
沙世はいきなり言われて少し驚いたが「？あ、私は水野沙世。宜し

くお願いします」と言って笑いながら手を出した。
その時、
「こら、お前らー自己紹介は後でって言ったろ、勝手に始めるな！
少しは先生の話も聞けー」
握手をしようとした時、教師に言われて慌てて2人とも手を引っ込めた。
「こらー春樹～今日は朝からボケ過ぎだぞー！！」
誰かの声で皆笑い声があがる。今度は2人が赤面になって顔をうつむかせた。
すると、
「み、水野っごめんな！」
小さな声で手を合わせながら春樹が言ってきた。
「私もごめん、大丈夫だから」
沙世がそう言うと、春樹はまた困ったように笑ってきた。つられて沙世も笑う。

この時は何も知らず笑っていた。

「運命」とは哀しいもの。
この日から、既にカウントダウンは始まっていた――――

第二部　違和感

満開の桜。
中学生最後の１年間。
クラス分けが最悪だった事がどうとかは置いといて…なんとなく、分からないけど楽しくやっていけそうな気がした。

始業式から１週間程たったある日、そんな事を美咲に言ってみると…
「は！？私なんて全っ然楽しくも何とも無いよ！何か知らないけど色んな男に交際申し込まれるし…沙世がいるからいいものの、まったく…」
沙世の話を聞くと、明らかに不機嫌そうな顔をしてぶつぶつと文句を言った。
「あははは…」
困ったように笑うと「私は沙世だけいれば良いんだよ、男とか…うっさいんだもん」そう言って美咲は笑ってきた。
美咲ははっきり言って「すごく美人」だ。
スタイルも良いし色も白いし、私と比べると……なんて考えて落ち込む沙世。
だから、美咲に好意を持つ男子は数多い。特に、美咲の様な人ほどしつこく付きまとってリベンジを仕掛ける人が多いのだ。
美咲は元々、男子には興味が全くといって良いほど無い。そのせいで、男子達が熱くなるのかもしれない…
ともかく、美咲からすれば「男なんて目の上のたんこぶ」状態。男子達はこりることも無く、毎日毎日放課後にアタックしてくるのだ。
沙世から見ると振られていく男子達は「どんまい」と言うしかなく、美咲は美咲で本当に大変そうだなぁと思っていた。
「美咲も毎日毎日大変だもんね～、頑張れ！その内あっちもあきらめるって！」

「…だと良いけどね…」
そう言って廊下の窓の方を見ると、この間美咲に交際を申し込んできた男子生徒がこっちを見ていた。
つられて美咲も沙世の目線を追うと「はぁ～…！！」と言ってため息をついた。沙世は苦笑いした。
美咲は面倒くさそうに窓の所まで行くと「…何、また来たの？」と素っ気無く言った。男子は「俺、やっぱあきらめきれないからー…」と言う。
「だぁからさぁ～、私男自体興味無いって言ってるでしょ？しつこいってば！」
美咲が遂に怒った。男子はまだ未練があるような顔をしていたが、
「……じゃあ、遠藤が好きな奴教えてくれたら…あきらめるよ…」
そう決心を決めた様だった。「恋」の「こ」の字も知らない沙世だったが、本気だという気持ちは伝わってきた。
美咲にも伝わったらしい、はいはいと言った感じでこう答えた。
「好きな奴は～…沙世」
「え？」
男子がびっくりした顔をする。
「だから、沙世だって言ってんのっ」
「あはははは～……」
沙世は思わず笑ってしまう。美咲が好きな人を聞かれるといつも必ず決まって「沙世」、と答えるのだ。
「え、でもだって女子だろ、男子は？」
「女子も男子も関係ない。男子は嫌いだってば」
「でもそれは友達としてだろ。本気なわけないだろが、同姓だろ？」
「…どっちにしろ、そーゆう事。私、はっきり言ってまだ女子の方が好きだし…」
美咲はそれだけ言うと、窓をピシャッと閉めた。
「おつかれ～」

笑いながら沙世が手を振る。美咲が疲れた顔をして戻ってくる。
「…笑い事じゃないよ」
美咲はそう言うと少し呆れながら、でも困ったように笑った。
そして、また2人で他愛も無い会話が始まろうとした。
その時、
「美咲ー、また告られてたなぁ。しかも同じ奴に！」
（あ、春樹…）
どこからか、いきなり春樹が口を出してきた。美咲は不機嫌そうに春樹を睨んだ。
「…うるさい。しつこい奴って嫌いなの」
「み、美咲～睨まないの！」
邪気が溢れ出している美咲を、沙世が何とか抑えようと必死になって言った。
「……沙世がそうゆうなら、頑張って止めるわ」
「ブッアッハハハハッ！」
「！？」
驚いて春樹の方を見ると、お腹を抱えて爆笑していた。
「え、何。どうかした！？」
沙世がそう聞くが春樹は爆笑していて耳に入っていないらしい。美咲が「気違い」だとでも言うような目で春樹を見ている。
沙世も呆れて春樹を見た。
「ッ…はぁ～。あ、ごめんごめんっ！」
ようやく春樹は自力で抑えた。春樹の目に涙が浮かんでいる。
（それ程笑える事なんて今あったっけ…）
沙世は考えたが、当然の事頭の中に浮かぶ答えは何も無かった。
だが、その代わりに何か違う別の感じが心に入ってきた様な気がした。
（…？なんだろ…）
そんな事を考えていると、春樹が笑っていた真相を明かし始めていた。

美咲と春樹が喋っている。
「――だからさっき、美咲が水野に注意されてただろ？外見大人っぽいのは美咲なのに水野に叱られてて…」

「美咲」
「だから何よ」
「だぁから、美咲と水野が親子みたいに見えんのに何か違くて、笑えたの！」

「美咲」
「何それ。やっぱあんたおかしいよ」
「何が！」
「頭に決まってるでしょ？」
「なんじゃそりゃ！美咲の方がおかしいって！」

「美咲」

――…何？
何かがおかしい…。
何かが心の中でモヤモヤしてて、気持ち悪い。
春樹が「美咲」って呼ぶだけで…痛い。
なんだろ、分からない……――

そんな事を考えていることに夢中だった沙世。
その姿を美咲が見ていた事も

気づかずに…

第三部　過去

「美咲」

春樹が美咲の名前を呼んだだけ。
それだけなのに…胸が痛む。
こんな気持ちには、納得がいかない。

＊＊＊＊＊
「あ、あのさっ美咲と春樹って何か関係あるんですか！？」
「は？」
単刀直入に聞かれてかなり驚いている男子。
それは勿論驚くだろう。いきなりしゃべった事も無い女子から呼び出されて、いきなりそんな事を聞かれたら…

「美咲」
彼がそう呼んでいるのを聞いた日から、何か心にまとわり付くものがあった。
「名前で呼ぶなんて、別に普通」
確かにそうだと思う。
だけど、美咲は男女どちらからも「遠藤」や「遠藤さん」と呼ばれている。「美咲」と呼んでいるのは、沙世と春樹だけ。
それに、春樹が女子の事を名前で呼んでいるのは…美咲だけ…
ついに我慢できなくなった沙世。だが、本人に聞く勇気も無ければ、

美咲に聞く勇気も無い。
そこで考えて出した結論が「仲が良さそうな男女に聞く」だった。
そして、今にいたる…

「は、何で？」
何か疑わしそうな目で見てくる男子。思わず沙世も冷汗が出てくる。
（さ、さすがに単刀直入で聞くのはマズかったか・・・っ私の事知ってるか分からないし。一応、同じクラスだけど・・・）
沈黙が続く…
目の前に居るのは、沙世と同じクラスでいつも春樹の隣に居る男子…高橋潤（たかはしじゅん）。
あまり表情が変わらなく、一言で言うと「クール」。髪質は柔らかくて薄い茶髪。背は春樹よりも少し高そう…。
いつも眠そうにしていて何を考えているのか分からない不思議な人、でも、とても優しい人だと人気が高い。
春樹と並ぶと良い「絵」になるらしい…。
（…確かに。初対面からしてもかっこいいと思えるし、ね…）
「…で、何でそんな事聞くの？」
沈黙の間に潤の声が響く。
「あ、あのですねっ何か…」

「…名前で、呼びあってたから…」
「？…あ、あぁー…」
沙世の質問に一瞬「分からない」と言う様な顔をしたが、すぐに思い出した様に返事をした。
また、沈黙が続いた。
すると、潤が「あのさ――」と声をかけてきた。
「あ、はいっ！」
驚いて顔を上げると、潤からとんでもない質問が投げかかってきた。
「――あんたさ、春樹の事好きなの？」

「え？」
とんでもない質問に、沙世の目は点になってしまうぐらい唖然とした。
（え…好きって、春樹の事？…でも私、男子好きになった事無いし…）
少し考えてから、沙世は言った。心に違和感を感じながら…
「…いや、好きじゃ無いと思うよ。たぶん！…って何で？」
「いや、別に。ま、好きじゃ無いんなら言ってもかまわないか」
潤は、少し困った様な顔をしていたが「ま、いっか」と言うと美咲達の話し始めた。
「あいつらさ、て言うか、春樹の一方的だったんかも知れないけど…中２の頃、付き合ってたんだって」

第四部　始まり

『あいつらさ、て言うか、春樹の一方的だったんかも知れないけど…中2の頃、付き合ってたんだって』

あの日、潤から聞いた話。
この言葉が、どうしても耳から…離れない…――――

「――世！さーよっ！」

昼休み。
誰かが沙世の事を呼ぶ。沙世はボーっとしていて耳にも入らない。
三度目の正直というのだろうか、誰かがもう一度名前を呼んだ。
「沙世っ！！」
「ぅあ、はいっ！！」
驚いて机から顔を上げる沙世。すると呼んだ相手は美咲だったらしい、目の前に美咲の顔があった。
呼ばれた方も驚いているが、呼んだ美咲の方も驚いた顔をしていた。
「あ、ごめん。ちょっと考え事してたっぽい」
「ったく…別に良いよ。それより何？不安な事でもあるの？」
「！あのっ――」
気に掛けてもらえた事が嬉しかったのだろう、だが、急に沙世は黙り込んでしまった。
「沙世？」
「――っな、何でもないよ。何でも、ない」
今、何かを言いかけそうになった沙世。凄く頼りになる美咲。だが、この話だけは美咲には話せない。

――あの日

「えっ付き合ってたの！？」
驚きの過去。
思わず大声をあげてしまう沙世。
「うん。って言っても春樹の一方的だったけど…」
「一方的？」
初恋がまだの沙世には何が何だか分からない。すると、潤は苦笑いしながら言った。
「ま、簡単に言うと春樹が遠藤の事大好きだったんだよ。今はどーだか知らんけどね」
「へ、へぇ～。知らなかった…」
突然の事に動揺を隠せない沙世。自分では気づいていないが、潤は沙世の動揺が読み取れていた。
「…気にする程の事じゃないよ。遠藤が他の男に告られてても、笑ってるし」
「でも、じゃあ美咲は？」そう聞きたかった。気にかかる事がまだ山程あった。
だが沙世は聞けなかった。聞きたくない、と何処かで自分が言っている様な気がして…
「…うん」
ただ、そう頷くしかなかった。

「…春樹の事？」
「うん…って、ぇえ！？」
ガタンッ
美咲のいきなりの言葉に驚き、椅子から思わず立ち上がってしまった沙世。その様子に美咲が笑う。

「なっ何で！」
「今、『うん』って言ったよね」
笑いながら美咲が言う。沙世は素直に答えてしまった自分に対して赤面した。だが、そんな事はどうでも良かった。ただ…
…美咲にバレている。

その事に対してかなり沙世は焦っていた。
誰かに聞いた…？潤？それとも、誰かが見ていたとか…？それとも
――
「――私ね、気づいてたけど…？」
（……え…）
美咲はそう言って私の方をみると「クスッ」と笑った。そのまま「分からない」と言う様な沙世の顔を見ながら、話し始めた。
この間、美咲と春樹のやりとりを見て、違和感を感じた事。
その気持ちを無意識のうちに否定し続けている事…
美咲は心理学者のようにピタリと当ててくる。まるで、心を見透かされている様だった。
沙世は、美咲に口出しできず、黙って美咲の話を聞いていた。あまりにも当たりすぎていて驚いたのだ。
すると、
「――…んにしても、これでここまで考える事？他に誰かから何か聞いたんじゃない？」
美咲の言葉にハッとする沙世。
（…高橋君から聞いたやつ。言っても、良いのかな…）
少し考えたが、もうバレてしまっている。今さら隠そうとしても無駄だと思った沙世は美咲に全部話した。
話しているとなぜか目が焼ける様に熱くなっていった。思わず下を向く沙世。だが、それは逆効果で、次々と溢れ出していってしまった。

こんな事で泣くのは初めてで、余計混乱してしまう。だが、最後まで沙世は話続けた。
話が終わると美咲は沙世の頭にポンと手を置いて「ったくあのバカが。…あんたも、考え込みすぎ」と言った。
口調は少しきつかったが、とても優しい言葉だった。
そして
「…あのさ、沙世はたぶん春樹の事好きなんだよ」
と、言った。
「え？そんな事な――！」
そう沙世が言い掛けた時、
「あれ、何やってんの美咲…って何泣かせてんだよ！」
沙世と美咲が驚いて2人を見る。
春樹と潤がどこからか教室に帰ってきたのだ。そして、沙世が泣いていると分かると、慌てて近寄ってきた。
「いじめ？あ、お金まきあげたりするやつしたんだろお前！」
「春樹…それ〈かつあげ〉って言うんだよ」（潤）
「そーそれ！」
春樹はおどおどしながら「大丈夫か？どっか痛いん？」と沙世に聞いてくる。
沙世は「何でもないから、大丈夫だから」と言った。すると、なぜだか知らないが笑えてきた。
「え、何…まぁ、よく分かんないけど――」
ポン　ポン
そう言うと沙世の頭に手を置いてくれた。理由も知らないのにとても気に掛けてくれた。

「ともかくさ、元気出せよー？」
そう言った春樹の言葉に、沙世は胸が締め付けられるような想いがつのった。
（…あぁ、私って…）

好きなんだなぁ、春樹の事が…

この時初めて実感した、「恋」というものを。「好き」と言う気持ちを。

だけどこの時はまだスタート地点に立っただけ。

私が「恋」の苦さを知るのは、

これからまだまだ先の事でした…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9011a/

春のさくらんぼ。

2010年12月3日22時53分発行